

## E. T. ジェンドリンの哲学（その3）

—「過程価値」ないし「プロセス・エシックス（過程倫理学）」の観点—

### Philosophy of E. T. Gendlin (Part III)

諸 富 祥 彦

Yoshihiko MOROTOMI

#### I はじめに — ロジャーズの有機体的価値づけ過程論 —

本稿では、現代米国の哲学者であり、フォーカシング指向心理療法と呼ばれる独自の立場を提唱する心理療法家でもあるジェンドリン (Gendlin, E. T., 1926~) の倫理学を検討する。

そのための予備的考察として、ジェンドリンの心理療法分野での恩師であり共同研究者でもあるクライアント中心療法の創始者、カール・ロジャーズ (Rogers, C. R., 1902~1987) の倫理学を概観しておきたい。ロジャーズとの対比において、ジェンドリン倫理学の特徴がよりいっそうクリアになると考えられるからである。

ロジャーズは、その最盛期(1950年代)において心理療法の過程研究に専心していく。そこで発見されたクライアントの変化過程とは次のようなものであった。

不適応を起こし来談してきたクライアントは初め、外部から取り入れられた概念的価値に拘束され、その思考と行動は硬直している。しかし心理療法の過程において、セラピストから一定の心理的条件を与えられると、彼は徐々にそれまで依り所としていた自分の諸価値に疑問を感じ始め、それに「不満を感じるようになり、自分は今まで、自分がするのが当然だと他の人が思っていたことをしてきたという態度をしばしば表明するようになる」<sup>(1)</sup>。そして自らの身体感覚や感情を手がかりに、諸価値を吟味していくようになる。この時彼は「価値判断に基づく証拠を提供するのは、自分自身の有機体だということ」<sup>(2)</sup>、「彼自身の感覚、彼自身の身体的装置が、価値判断をするための、そしてそれを絶えず改訂するためのデータを提供することができる」<sup>(3)</sup>ということを発見するのである。

そして成功した心理療法の終極点においてクライアントはついに、自らの感情や身体感覚に基づいて、変化と流動性に富んだ自由な価値判断ができるようになる。彼はもはや理由づけによる知的な正当化を必要とせず、「私はこの経験（このこと、この方向）が正しいと感じる。後になっておそらく、自分がなぜそれが正しいと感じたのかわかるだろう」<sup>(4)</sup>といった仕方でも価値選択できるようになる。彼は「自分の感情や直観は自分の知性よりも賢明であろうし、全体的な人間としての自分は、単なる思考よりも分別があり、正確だということ」<sup>(5)</sup>を自覚しているのである。

このクライアントの変化過程はまた、見せかけ、偽り、他者の期待に沿うことから離れ、自己自身となり、他者と深い関係を持つことへと向かう変化であるとも言われる。これは言い換えれば、心理療法においてクライアントは「誠実さ、独立、自己指示、自己知、社会的応答、社会的責任、愛のある対人関係といった方向を重視するようになる」<sup>(6)</sup>ということである。注目に値するのは、クライアントの示すこうした方向性は、セラピストによって指示されたものではなく、受容的で安全な心理的風土にさらされた時に、クライアントの中から自ずと生じるものだということである。

心理療法においてクライアントが示す変化についてのこうした観察事実からロジャーズは、「人間個人の内部には組織化された価値づけ過程のための、有機体的基盤が存在する」<sup>(7)</sup>という見解を提示する。人間は生まれながらにして価値づけ過程のための有機体的基盤を有している。

幼児は自らの有機体的、身体的智慧を十分に利用した価値づけを遂行している。人がそれをできなくなるのは、他者からの愛を得るためその人が示す承認の条件 (conditions of worth) に従うようになり、この有機体的基盤との接触を失うためである。個人の心理的不適応はここから生じる。「個人の諸価値からなる知的構造と、彼の内部

で認知されずに進行中の価値づけ過程との間に存在する基本的食い違い——これが現代人の自己疎外の基本的様相の一部<sup>(8)</sup>なのである。そして人は心理療法におけるのと同様の心理的風土を十分に与えられるならいつでも、価値づけ過程の基盤との接触を回復し始めるのである。

ロジャーズはまた、心理療法においてクライアントが示す変化には先に述べたような共通の方向性がみられるという事実から、「一貫した、もしくは安定した概念的価値体系を持っていなくても、彼の内部の価値づけ過程は、文化と時代を越えた一定した価値方向の生起を導くだろう<sup>(9)</sup>と推測する。そしてさらに「この共通の価値方向は、個人自身の発展と、共同体における他者の発展とを強化する類のものであり、また、種の生存と進化とに貢献するような類のものである<sup>(10)</sup>とも言うのである。こうした信念を基に、ロジャーズは1960年代後半から、セラピーという密室を抜け出し、教室やエンカウンター・グループなど様々な場面における人間関係一般の改革とそれによる人間性回復への運動（それは「静かなる革命」と呼ばれる）に乗り出す。

ロジャーズの言う「価値づけ過程のための有機体的基盤」は心理療法における観察事実から推測された「人間の本質についての仮説」であり、彼の「信念」である。それはいかなる仕方でも確認不可能である。倫理学における彼の貢献はむしろ、心理療法においてクライアントは硬直した概念的価値への依存から離れていき、価値判断において自己の感情や身体的、有機体的感覚に注意を向け始めるという「観察事実」を指摘した点にあり。

## II 価値づけの基準としての「体験過程の推進」

ジェンドリンはロジャーズ派の研究グループに入り、先の観察事実のより厳密な理論化を試みる。ロジャーズによって、感情、身体的有機体的感覚などと呼ばれていたものはジェンドリンによって「体験過程 (experiencing)」と命名され、彼の理論における中心的位置を与えられる。この概念が過程という特質を持つ点が特に重要である。

ジェンドリンは人間を、環境との相互作用において絶えず進展し変化しつつある「生命過程(a living process)」と捉える。体験過程とはこの生命過程の心理的次元であり、「生きている身体の内的な感知力<sup>(11)</sup>」である。それは「恒常的な、人間が生きていることのある側面<sup>(12)</sup>」であり、「内的に感受される生命の恒常的な常に現在存在している、根本的な現象<sup>(13)</sup>」である。それは「具体的な感情の所与<sup>(14)</sup>」であり、我々が自己の内部に注意を向ける時、そこに流れているのを確かめることができる、漠然とした曖昧な感じの流れである。それは、それが「何であるか」をはっきり示すことはできない（前概念的な）ものであるが、それがそこに「ある」ことは確かに感じることができる。「我々が注意を向けることできわめてはっきりと問い合わせることができる<sup>(15)</sup>」ものである。

体験過程はまた、その内に無数の「暗黙の(implicit)意味」を有しており、それに直接問い合わせ、ぴったりとくるシンボルを探すことによって、「数多くのさまざまな意味を生み出すために用いることができる<sup>(16)</sup>」ものである。たとえば我々は、ついさっきまで「これこそ自分の言いたいことだ」と感じていたある言葉が、何となくしっくりこなく感じられ始めるのを度々経験する。そんな時、自分の言いたいことにもっとピッタリくる別の言葉を探すためには、この内的な体験過程（フェルト・センス）に注意を向けなくてはならない。このように体験過程は我々の概念形成の源泉である。

ジェンドリンは概念形成においてフェルト・センスが果たすこの働きは、デューイが「暗示(ほのめかし, suggestion)」という言葉で示そうとしたもの、すなわち、問題に対して暗に示された(suggested)解決が現れる(arising)ことだと考える<sup>(17)</sup>。デューイにとって暗示とは「洗練され、仮説に変えられ、論理的一貫性と客観的確認に向けて制御され、検証されるべき生の素材(raw material)」<sup>(18)</sup>であるが、この「暗示それ自体がいかんして生じ、またどのように機能するかについてはあまり述べられていない<sup>(19)</sup>」。ジェンドリンはデューイにおいて未解決のこの問題を自らの哲学上の課題の一つとする。

ジェンドリンによれば、治癒とは環境と円滑に相互作用することで生命過程がとどこおりなく進展していくことである。その心理的次元である体験過程が十分に進展していくためには、それが言葉、イメージ、動作、音といった広い意味でのシンボルと十分に相互作用することが必要である。体験過程の暗黙の意味はいわばまだ未完であり、適切なシンボルによって解明されるのを待っている。体験過程が適切なシンボルと相互作用し、その暗黙の側面が明らかにされることによって初めて、体験過程は先へと進んでいくことができるのである。ジェンド

リンはこれを体験過程の「推進(carrying forward)」と呼ぶ。

心理療法が成功する時、クライアントは自らの内部の漠然とした感じの流れ(体験過程)に直接に注意を向け、それに問い合わせ、まさにぴったりとくるシンボル(言葉やイメージなど)を見つけ出すことによって、その暗黙の意味を明らかにしなければならない。それによって彼の体験過程のそれまで滞っていた側面が推進され、体験過程が進行し始めるのである。体験過程の推進が生じる時、それはクライアントによって直接感じることできる体験の効果、すなわち身体的解放感を伴う<sup>(20)</sup>。そしてこの体験過程への直接の問い合わせという内なる行為は、外部からある程度観察可能なものである。(そのためジェンドリンらは、この体験過程への問い合わせとそれに続く効果という点に着目した実証研究を重ねていくことができた。)

ロジャーズの提示した「価値づけ過程の有機体的基盤」とジェンドリンの提示した「体験過程」概念との明確な相違は、前者が「いかにしても確かめようのない人間の本质についての仮説」であるのに対し、後者は個人によって直接問い合わせることができ、またその暗黙の側面が適切なシンボルによって解明され、体験過程が推進されるならば、その効果もまた「個人によって内的に確認可能なもの」である点にある。

ジェンドリンは成功する心理療法におけるこの「体験過程の推進」という基準を、個人の価値づけ過程の基準としてもそのまま採用する。つまりジェンドリンによれば、価値づけにおいて重要なのは、結果として出される言語的結論の「内容」ではなく、その「過程」においてこの「体験過程の推進」が生じているかどうかなのである。体験過程への直接の問い合わせに続いて、その暗黙の意味が解明され、それが推進されるという体験的なプロセスが価値づけの過程において生じているか否かが、その価値づけが適切なものであるかどうかの内的に確認可能な基準なのである。

### Ⅲ 「過程価値説」—— 価値の結論の「内容」ではなく「過程」への着目 ——

以上のような考えに基づいて、ジェンドリンは言う。「大切なのは、抽象的な価値の結論だけでなく、むしろ、その価値の結論を導く過程の様式」<sup>(21)</sup>のほうである。したがって、価値づけの結果としての言語的内容以上に、その過程に着目すべきである、と。

みずからのこうした考えをジェンドリンは「過程価値(process-value)」説ないし「プロセス・エシックス(過程倫理学)」と呼び、その倫理学上の意義について、「『過程価値』説は倫理学を良い事柄や悪い事柄や結論についての規範から、様式(how)の倫理へと移行させる」<sup>(22)</sup>と言う。

ここでは徹底して価値づけ過程における個人の体験様式が重視され、それは個人差、文化差を越えた価値づけの普遍的に妥当する基準とみなされる。「概念的、文化的、個人的な言語的表現が異なる一方で、ある(適切な)所与の価値や好みはより十分に進行しつつある体験過程それ自体の一つの例であるといった意味において、普遍的な過程価値が存在する」<sup>(23)</sup>のである。(ジェンドリンは、諸々の概念的意味や価値はいつも、それが指し示そうとする体験過程自体を表す一つの例である点に着目し、意味や価値のこの再帰的性質をiofi[it of itselfの略]の原理と呼ぶ。<sup>(24)</sup>)

ジェンドリンによれば、価値選択の「内容」にではなく、その「過程」における具体的な「体験様式」に着目した時をはじめて、普遍的に妥当する基準が見出されるのである。

注意すべきは、この「体験的プロセス」の有する独自の方向性は、他者や文化によって予め決められたものではなく、また本人自身が予め保持していた概念的価値によって指示されるものでもなく、我々が自らの内的な体験過程に注意を向ける時にはじめて、また、自発的に生じてくるものだという点である。つまり体験的な「プロセスは、それ自身の方向性を持っているが、それはたった今、直接に直面される感じられる意味によって与えられる」<sup>(25)</sup>ものなのである。「体験的プロセスはそれ自身の方向性を持っており、その方向は、(人がそれに焦点を当て、分化する時に現れてき、開け、その結果、レファレント[問い合わせ先]に移動が生じたり感じられる変化が生じたりして、新しい異なった感じられる意味が現れてくる、という)具体的な感じられる意味自身の持つ方向性によって与えられる」<sup>(26)</sup>のである。

こうして、ジェンドリンにおいては、価値づけに関する従来の発想を逆転させることが要請されてくる。通常、

価値づけの過程は、個人の信じる（概念的）価値によって導かれるものであり、それに即してさまざまな状況的要因の重みづけをした結果、選択すべき行動が導かれるものだと考えられている。しかし「価値の結論はいつもあまりにも一般的であり、そのためそれは体験過程の特定の諸側面を分化し、取り出すために用いることはできない」<sup>(27)</sup>。したがって「価値の結論はおそらく、体験のプロセスを規定できない」<sup>(28)</sup>。

ジェンドリンによれば、この順序は全く逆転されるべきである。適切な価値づけの過程においては、その過程そのものが、とりわけ、体験のプロセスの生起が価値の概念を導き、規定するのである。ジェンドリンは言う。「我々はまず最初に何らかの体系から価値の結論を採択し、その後でそれを適用して、さまざまな可能性の間の選択をするのではない」<sup>(29)</sup>。むしろ「我々がまずしなければならぬことは、体験される意味（感じられる意味）に直面し、それを分化することである」<sup>(30)</sup>。

ジェンドリンはこのことを次のような例を使って説明する。

ある若者が医学部に進学するという価値選択をしたとしよう。この価値選択が適切かどうかという問題において重要なのは「彼や我々が、医学部や権威や医学による援助に置いている価値」<sup>(31)</sup> 如何なのではない。むしろ問題は、どういった類の過程がこの結論へ彼を導いたかである。「もし彼が自らの感情のほんのわずかにしか取り組んでおらず、たとえば、彼がひどくそれを嫌がっていたにもかかわらず、その感覚を解決することなく、家族の希望に譲歩したのだとすると」<sup>(32)</sup>、我々は、たとえ医学というものの価値を十分に認めていたとしても、この価値選択は誤っているとみなすべきだろう。「逆に、彼がもし、自らの人生や家族についての自分の個人的感情の多くに問い合わせて、多くの点においてこれらの感情をより分化し、以前は分化していなかった意味を生じさせているならば」<sup>(33)</sup>、この場合には、たとえ我々が医学というものにそれほど価値を認めていないような時でも、この価値選択は適切なものであると言えるだろう。同様にたとえば、ある学生が行った「大学を辞める」という選択も、それが自らの「感情や意味の十分な分化」<sup>(34)</sup> という過程の結果であれば適切であると考えられるが、逆に「未検討の困難さから逃げ、まだ取り組んでいない失敗感に屈した」<sup>(35)</sup> 結果であればそれは不適切などと言わざるをえない。

ジェンドリンのこの指摘には臨床事例に基づいた説得力があると思われる。

#### IV 「過程価値説」は社会的な選択場面においても妥当するか

ここで一つの疑問が生じてくる。

心理療法をベースにしたジェンドリンの「過程価値説」ないし「プロセス・エシックス（過程倫理学）」は、先の学生の進路選択の例のような「個人的な価値選択」場面においてはじゅうぶんに説得力を持ちうるとしても、人間の価値選択はより広い幅を持っている。それは果して、複数の人間の利害がからむような社会的ないし政治的な価値選択場面においても妥当するものであろうか、という疑問である。

概念的道德原理を指針としておこなわれる社会的な価値選択の例として、道德性の発達心理学者として著名なローレンス・コールバーグの「公正の原理」による価値選択をとりあげてみよう。コールバーグの言う「公正の原理」とは、「ある場面において複数の主張が競合する時に、これらの具体的主張をいかに解決するかを語ってくれる」<sup>(36)</sup> ものであり、そうした葛藤場面に直面した際に、それに即して「具体的状況における道德的に関連する全ての要素を覚知し、統合」<sup>(37)</sup> するための概念的枠組みである。こうした道德原理は我々が実際に葛藤場面に直面した際に重要な手がかりを与えてくれる。

ジェンドリンはこうした「概念的枠組み」としての道德原理の意義を認めないのであろうか。そうではない。

ジェンドリンも価値選択の指針として（多くは文化的に伝達される）道德原理の果たすべき役割を決して軽視しているわけではない。ジェンドリンは、むしろそれを人間の生活にとって不可欠のもの、伝達されるべきものとみなしている。

ジェンドリンは言う。（もし全ての文化的な意味や価値を投げ捨てるような真似をするならば）「我々から人間を文明化する主要な力が奪われることになるだろう」<sup>(38)</sup>。「全ての価値や意味が我々自身の独立した創造性を通して発見されるわけではない。——我々が知ったり経験したりするもののほとんどは、我々がそれを持つように助け

られたものなのである」<sup>(39)</sup>。

特に、何が価値があり、意味があるかを発見する機会をほとんど持っていない幼児は両親その他からそれを教わる必要がある。「我々は各々の結論の跡を体験的にたどりきるまで、正直に、分別を持って行動するのを控えておくことは必ずしもできない」<sup>(40)</sup>ので、「自分自身の体験において見出すよりもずっと前に、信頼できるものの中から、結論や原則を採用しておかなければならない」<sup>(41)</sup>のである。(ジェンドリンはこのように文化的価値が幼児にとって持つ意味を積極的に評価するが、その際、模倣などを通してなされる文化的価値の直接的伝達を、(1)それが混乱や葛藤を伴って伝達される場合と(2)期待や信念を持って伝達される場合とに分ける。後者のケースであれば、そこには大いに意味があると言うのである。後者の場合、そこで採用された価値に従って行動することがそれに関連した具体的体験への期待と忍耐を生むが、その結果、ある体験のプロセスが生じる可能性が高まるからである。この点、文化的価値の直接的伝達に関してロジャーズが、有機体としての人間にとって持つ否定的な側面ばかりを強調し、そのため「反文化的」と評されたのとはかなり異なっている)。

しかし問題は、こうした概念的倫理原則を適用するだけでは、現実の選択はまったくなしえないという点にある。「ある倫理的規則が全ての個人や状況に適合することなどない。— 実際、それが適合する現実の状況など一つもない。(規則はいつもあまりに一般的すぎる)」<sup>(42)</sup>のである。

では社会的場面における価値選択において決定的に重要なものとは何か。

ジェンドリンはそれを個人的選択場面と同様、選択過程における「体験過程の推進」「体験のプロセス」の生起である、と言う。

つまりジェンドリンは、「過程価値説」ないし「プロセス・エシックス (過程倫理学)」は社会的選択場面においても妥当する、と言うのである。

## V 状況とその乗り越え — potentialities と possibilities —

ジェンドリンのこうした考えの前提には、人間と状況の関係についての次のような考えがある。「我々が恣意的に払いのけることができない、自分についての状況や条件という『事実性』が存在する。我々は状況を、それを解釈しその中で行為することにおいて『乗り越え』なくてはならない」<sup>(43)</sup>。「ある状況は、事実性と私のその事実の乗り越えという両方の点においてのものである」<sup>(44)</sup>。

つまりジェンドリンは、人間にとって状況とは単なる事実性ではなく、乗り越えるべきものである、と指摘するのである。

我々にとって状況は、固定された事実としての側面、言葉で記述することのできる顕在的な側面だけから成り立っているのではない。むしろ状況の多くの側面は、我々にとって未だ曖昧な、暗黙の意味を持つものとして存在している。したがって我々は、ある状況の持つ顕在的な側面、及び概念的枠組みによるその分析だけから直ちにそこでの当為を知ることはできない。我々はその状況を主体的に解釈することによって、その状況の未だ覆い隠されている側面を浮かび上げさせ、その暗黙の意味を明るみに出し、そこで行為することでその状況を「乗り越え」なくてはならない、のである。

このことを別の角度から見れば、ある特定の状況が我々に提示してくる選択肢は本来、未だ形成されていないものだ、ということである。我々はある状況において、顕在的に示される選択肢を並べあげ、そのリストの中から最善のものを選択すればいいわけではない。むしろその状況の中で未だ被い隠されている選択肢をも明るみに出すことが肝要なのである。

ジェンドリンはこの点をpotentialities と possibilitiesの区別に基づいて鋭くこう指摘する。「potentialitiesは既に提示された選択肢である。我々は無限のpotentialitiesのリストの中からあるものを選ぶ。他方、possibilityは・・・未だに形成されていない、未だ考えつかれていない選択肢を意味している」<sup>(45)</sup>。つまり「自由は新しい possibilities、我々が以前には思いつかなかった選択肢の案出にかかっている。それは状況を再解釈し、より特定の分化する我々の力にかかっている」<sup>(46)</sup>のである。

そしてこの possibilitiesの案出において決定的な役割を果たすのが、我々の身体的感情、体験過程なのである。

「possibility は身体のものである。それは我々の身体であり、世界という文脈における我々の存在である。・・・身体は環境において我々がいかにかに生きているかということであり、それゆえ我々は身体的な仕方、自らの生の全体的文脈を感じる」<sup>(47)</sup>。

この身体的な「感情は、世界（我々のいる状況）における行為へのpossibilities」<sup>(48)</sup>を暗に示している。そのため我々は自らの体験過程に問い合わせ、それを正確に解明することによって、その状況の新しいpossibilityを案出し、それを乗り越えていくことができる。その状況のそれまで見えなかったさまざまな側面を浮かび上がらせ、そこでの新たな選択肢を形成することができるのである。

この点を例によって説明してみよう。

ある人がある友人に対して特にこれといった文句もないはずなのに、なぜかつい冷たい態度をとってしまう。彼は頭の中で「彼はいい人だ。仲良くしなくては」と自分に言い聞かせる。つまり、事実として既知の顕在的な友人の長所（例：「親切である」「彼は寛容である」など）をリストアップし、それに「友人とは仲良くすべきだ」という道徳規則を適用する。しかしなかなかうまくいかず、その友人とかかわっているとつい邪険な態度に出てしまう。

この彼が自分に言い聞かせるのをやめて「この友人は自分にとってどんな人なのだろう」と問うてみるとする。友人についてのまだ言葉になっていない漠然とした感じに注意を向け、それに言葉やイメージを当てはめてみる。すると「僕は彼を必要としていない」という言葉が浮かぶかもしれない。しかし、続けて思いを巡らしているうちに以前とは何か違う感じが開けてきて、「必要としていない」という言葉はどこか適切でないように思われ始めるかもしれない。そして、この新たに開けてきた感じに注意を向けていると、以前とは違った概念化、たとえば「・・・違う。僕は彼を嫌いなわけでも必要としていないわけでもない。僕は彼に魅力を感じているし、お互いに高めあっているような気持ちを抱くことすらある。ただ、彼の側にいる時のあのいやな感じは・・・そう・・・彼に僕がすぐに説得されてしまって、彼の支配下に置かれてしまいそうな、何か“押しつぶされそうな感じ”だ」といったような概念化が生じるかもしれない。

この例に示されるように、ある体験過程の暗黙の側面を浮かび上がらせる言葉を見つけることによって、その体験過程自身が（まさにその言葉と矛盾するような）別のものへと変化していく。「人は、感じられる意味を適切にシンボル化することによって、まさにその感じられる意味を変えていく」<sup>(49)</sup>のである。（ジェンドリンはこの感じられる意味の変化を「体験過程への直接の接近(direct access)」に対する「応答(response)」と呼び、それを体験過程の適切な解明の基準として位置づけている<sup>(50)</sup>。）

そしてこの感じられる意味の変化は、その人にとって状況そのものの変化を意味する。彼にはこの友人の、そしてその友人との関係についての、それまで被り隠されていた側面があらわとなってきた。そして、以前は念頭になかった選択肢、たとえば「これまでのようにやみくもに拒否するのをやめて一度あの、何か“押しつぶされそうな感じ”について話してみる」とか「今度彼とかかわる時には、自分とその“押しつぶされそうな感じ”との間にじゅうぶんな“間”をつくりながらかかわることにする」といった選択肢が浮かんでくる。体験過程への直接の接近、そしてそこからの応答、という「我々の『基準』によると、正確な解明は体験された具体的なものを変化させ、それを推進し、我々が（自己の直面する状況についての）新しい何か、以前には述べるのができなかった何かを浮かび上がらせるのを可能にする」<sup>(51)</sup>のである。

## VI 「相互に重なり合う単一体系」としての人間と状況

ここではごく簡単な例のみをあげたが、以上でも明らかなように、体験過程への直接の問い合わせとその解明は、複数の人間の欲求や利害が絡む社会的選択場面、とりわけ葛藤場面と呼ばれるような複雑な場面における現実の意思決定においてこそ、重要な役割を果たすものである。そうした難しい場面は、その直中にある人に、まさにその状況の未だ浮かび上がっていない新たな選択肢を浮かび上がらせることでその状況を「乗り越える」ことを当人に要求してくる。それは、既知の選択肢だけでは解決不可能な難問を突きつけてくる場面である。そんな場面にあるからこそ、人はその状況のさまざまな暗黙の側面を浮かび上がらせ新たな選択肢を浮上させること

が求められる。そしてその時、状況の事實的側面への道徳原理の適用を越えた、体験過程への直接の問い合わせとそれからの応答という微細な作業が重要な意味を持つてくるのである。

これまで述べてきたことから明らかなように、ジェンドリンは人間と状況の関係を「主体」と「主体によって解釈されるべき対象」といったようなスタティックな関係とは捉えない。両者はむしろ、共に相互に要求しあい相互に変化していくものとして捉えられている。すなわち、ジェンドリンにおいて「人間と状況は、相互に重なり合う単一の体系(a single interlocking system)」<sup>(52)</sup>なのであり、したがって「ある状況はある新しい行為を要請し」<sup>(53)</sup>てくるものである。

先の例でも明らかなように、人が何かに気づく時、状況の新しい側面があらわとなり、その人にとってその状況そのものが変化している。その状況が人に求めるものも変わってくる。「ある状況は、その状況にぴったりときて、それを変えるような行為を求めている(is-for)。状況はそれ自体で、ある変化へと向かっている」<sup>(54)</sup>。

ある状況の変化しない事實的側面を「何かによって固定されて」<sup>(55)</sup>いるものと考え、そこでの行為を「そこから論理的に引き出す」<sup>(56)</sup>ことができないのはそのためである。

また逆に、この「ある新しい行為は・・・事実からまったく規定されていないのでもない」<sup>(57)</sup>。むしろ、新しい行為とそれによる状況の「変化は・・・非常にきっちりと要請されている」<sup>(58)</sup>。そして「この要請は、無秩序なものではなく、半分自由を持ちつつ半分規定されている。それは所与の型や事実よりももっと秩序づけられている」<sup>(59)</sup>。

したがって、ある状況の要請にぴったりと適合するような行為は、ほんのわずかしかない。ある状況が我々に要請し、それを変化させるような新しい行為(possibility)を案出することが困難なのはこのためである。我々の現実生活における当為とは、このような、刻一刻状況から発せられてくる、その“状況からの要請”である。換言すれば、ある状況に置かれた、ある人にとっての、ある時にのみ妥当するような、一回限りの、実存的な当為である。これはきわめて困難な要請であり、それは体験過程への細心の注意を払った問い合わせと、その正確な解明とを欠いては不可能である。

現実の選択場面における適切な選択は、このように、体験過程の解明による状況の再解釈とそれによる新しいpossibilityの浮上とにかかっている。それは、状況の事實的側面に普遍の道徳原理を適用すれば事足りるものではない。この事情は、意思決定が困難な複雑な場面においていっそう当てはまるだろう。

そこでは、道徳的原理や規則そのものが、その都度新たに乗り越えられなくてはならない。「倫理的規則は、他の人々が、人生と価値を増大させるために見出したものを示す、短く切り取られた慣用語句であって、・・・〔中略〕・・・そのような規則を用いる時、我々は我々自身の状況の特定の具体的な経験される側面に向けてその規則を乗り越えなければならない」<sup>(60)</sup>のである。

また、実際の選択場面において「ある(倫理的)規則が『適合する』と言われるような場合があるが、そういう時にそれが実際に意味しているのは、その規則が推進するということ、つまり、それを用いることによって、状況とそのpossibilitiesについて直接に持たれている感覚に影響を与え、その結果新しく特定の何か明らかになるということなのだ」<sup>(61)</sup>とジェンドリンは言う。

道徳原理や規則などの概念的枠組みは、その概念の内容そのものに価値があるのではない。時にそれが有用であるのは、それが体験的に利用される限りにおいて、すなわち、その概念的枠組みを用いることで体験過程が解明され、その状況のそれまで被い隠されていた側面が浮かび上がって「新しく特定の何か」が明らかになる限りにおいてである。ここに、概念的枠組みについてのジェンドリンの一貫した姿勢を見出すことができる。

## Ⅶ おわりに

価値や道徳の問題は従来、抽象的理想的な論議に終始しがちであった。そこには生きた「人間」の入り込む余地があまり存在しなかった。たとえば、我が国の道徳教育の分野で頻りに用いられる「人間尊重」といった概念にしても、そこで用いられる「人間」は生きた生命体としての人間というよりもむしろ、対象化され、実体化された像としての人間にすぎない。

本稿で検討したジェンドリンの「過程価値」説ないし「プロセス・エシックス(過程倫理学)」は、道徳や価値

の世界に生きた人間の息吹を吹き込み、抽象的な道德原理の隙間を埋め、それを真に「人間」に根づいたものにする「視点の転換」を要請してくる。それは一言で言えば（道德や価値に関する）概念もしくは言葉と、生命過程としての人間との関係の逆転である。

この考えに従えば、たとえば「核の力で全世界が消えてしまえばいいのに」とか、「信頼できる人間なんて一人もいない」といった（その言語的内容からすれば非道德的な）言葉も、その言葉が個人の直接に感じられる暗黙の意味を指し示し、それを明らかにし、生命過程を先に進めるために用いられることができる。逆に「人を信頼しましょう」といった内容的には道德的な言葉も、人の生き方を硬直させるような用いられ方をすることもある。

問題は、言葉の内容（が道德的かどうか）ではなく、その用いられ方である。ある言葉が人間の体験過程を推進させるならばそれは（内容の如何にかかわらず）採択されるし、そうしないならばそれは捨てられる。人間の体験過程を推進させる言葉が価値あるものであり、道德的なものである。

## 註

- (1) Rogers, C.R., "A theory of personality change", In: *Client-Centered Therapy: Its current practice, implication and theory*, Houghton Mifflin, 1951, p.522.
- (2) Ibid., p.523.
- (3) Ibid.
- (4) Rogers, C.R., "A Modern Approach to the Valuing Process", In: *Freedom to Learn for the 80's*, Charles, E. Merril Publishing Company, 1983, p.261.
- (5) Ibid., p.264.
- (6) Ibid., p.268.
- (7) Ibid., p.264.
- (8) Ibid., p.261.
- (9) Ibid., pp.266-267.
- (10) Ibid., p.265.
- (11) Gendlin, E.T., *Experiencing and the Creation of Meaning*, The Free Press of Glenco. 1962, p.15.
- (12) Ibid., p.14.
- (13) Ibid., p.15.
- (14) Ibid., p.14.
- (15) Ibid., p.15.
- (16) Ibid.
- (17) Ibid., p.60.
- (18) Ibid., p.61.
- (19) Ibid.
- (20) Gendlin, E.T., "A Theory of Personality Change", In: Worchel, P. & Byrne, D.(ed.), *Personality Change*, John Wiley & Sons. Inc., 1964参照のこと。
- (21) Gendlin, E.T., "Values and the Process of Experiencing" (以下VPE.と略記する), In: Mahrer, A.(Ed.), *The Goals of Psychotherapy*, Appleton-Century Crofts, 1967, p.181.
- (22) Gendlin, E.T., *Experiential Psychotherapy.*(以下EP. と略記する) (Drafts), 1984, p.320.
- (23) VPE., p.181.
- (24) Gendlin, E.T., *Experiencing and the Creation of Meaning*. Chp.V. "The Principle of Universals: IOFI" 参照のこと。
- (25) VPE., p.182.
- (26) Ibid., p.187.

- (27) Ibid.  
(28) Ibid.  
(29) Ibid., p.185.  
(30) Ibid.  
(31) Ibid., p.181.  
(32) Ibid.  
(33) Ibid.  
(34) Ibid.  
(35) Ibid.  
(36) Kohlberg, L.H., "Stages of Moral Development as a Basis for Moral Education", In Beck, C.M., Crittenden, B. & Sullivan, E.V.(Ed.), *Moral Education*, Newman Press, 1971, p.61.  
(37) Ibid., p.60.  
(38) Gendlin, E.T., "Experiential Explication and Truth" (以下EET.と略記する), In: Molina, F.R.(Ed.), *The Sources of Existentialism as Philosophy*, Prentice-Hall, 1969, p.212.  
(39) VPE., p.197.  
(40) Ibid.  
(41) Ibid.  
(42) EET., p.212.  
(43) Ibid., p.202.  
(44) Ibid., p.203.  
(45) Ibid., p.202.  
(46) Ibid., p.203.  
(47) Ibid., p.202.  
(48) Ibid., p.207.  
(49) VPE., p.189.  
(50) EET., P.198.  
(51) Ibid., p.209.  
(52) Gendlin, E.T., "Process Ethics and the Political Question" (以下, PEPQ. と略記する), *Focusing Folio*, 1987, vol.5, p.71.  
(53) PEPQ., p.72.  
(54) Ibid.  
(55) Ibid.  
(56) Ibid.  
(57) Ibid.  
(58) Ibid., p.73.  
(59) Ibid.  
(60) EET., p.212.  
(61) Ibid.

\*本稿は拙稿『価値づけ過程』の普遍的基準としての『体験過程の推進』——価値の明確化の理論的根拠をC. R. ロジャーズ及びE. T. ジェンドリンに求めて——(日本道徳基礎教育学会『道徳教育研究』第154号 11~25頁 1989年)からジェンドリンの倫理学に関する部分を取り出し、それに大幅な削除・加筆・修正を加えた上で本稿のテーマ(ジェンドリン哲学研究)に即して再構成し、新たに独立した一本の論文として書き改めたものである。